

# 『明題拾要鈔』の成立

三 村 晃 功

## 一 はじめに

歌合の盛行につれて、実詠歌よりも題詠歌を詠む機会が増してくると、題詠歌を詠むうえでの手引き書、すなわち、先人の詠作を歌題ごとに集めて分類した類題集の出現が要請されてくる。そうした題詠歌を詠む初心者 of 要請に応えるべくして生まれた各種ある類題集のなかでも、結題のなかに含まれる一字ないし二字から引くことができ、類題集のほぼ最初のものであるのが藤原清輔撰『和歌一字抄』（原撰本）であろうことは、周知の事柄であろう。すなわち、『和歌一字抄』は「上下二巻。ある一字（または二字）を標目とし、上巻では『東』以下『田家』に至る一〇〇項目、下巻では『客』以下『証歌』に至る九五項目に分けて、その字を含む複数題または結題を掲げ、歌を集めたものである。一見私撰集にみえるが、作歌手引書として編纂されたものである。／現在、約一一七〇首前後の歌数をもつ諸伝本には、定家らの歌を含むので、増補本で、おそらく鎌倉中期にいまみるような形になったのだろうと推測されている。清輔がえらんだ原撰本と思われるものは上巻にのみ伝本が存し、下巻には定家の一〇首を含む中間本と目される本がある」（『新編国歌大観』解題）というとおりである。

この系統に属する類題集として、次に位置するのが後水尾院撰『一字御抄』だが、この類題集については、有吉保氏編『和歌文学辞典』（昭和五七・五、桜楓社）に、「元禄三」1690年刊。天・地・貴賤・不分・未開・村々等の題計三八五を掲げ、それらを含む結題の証歌約一八〇〇首を挙げる。典拠を示す注によれば、『古今六帖』『拾遺集』が上限とみられ、勅撰集・私撰集・私家集・定数歌・歌合等を資料とする。散佚書『石間集』からも採っており注意される。書陵部本ほかの写本および数種の刊本がある」と簡にして要を得た説明がある。なお、当該書については、日下幸男氏「後水尾院の文事」（『国文学論叢』第三十八輯、平成五・二）に言及があり、現時点では唯一の『一字御抄』の論考となっている。

このように、この種の類題集としては、清輔撰『和歌一字抄』と後水尾院撰『一字御抄』の両書を数える程度でしかないが、近時、『二字御抄』の直後に版行された『明題拾要鈔』なる類題集があることに気づいた。ちなみに、本書は、福井久蔵氏『大日本歌書奏覧上巻』（昭和四九・五再刊、国書刊行会）によると、「和歌明題拾要鈔 七巻 頓阿、後柏原、雅俊、堯雅、為家、伏見院等の詠歌数千首を歌題のいろは順に編みたるもの。上に歌題、次に原集の名、歌、その下に作者名を挙げたり。元禄七年出版」のとおりである。この福井氏の記事によると、『明題拾要鈔』は前述の両類題集を凌駕するほどの類題集とは憶測しえないが、試みに、「始初」の一字を含む歌題について、三つの類題集間の異同を調査してみると、次のような異同が指摘される。

まず、『和歌一字抄』（『新編国歌大観』本）の「初始」の項には、

初聞鶯

三条大納言公集

1 けふよりや梅の立枝に鶯の声さとなるるはじめなるらん

（二七一）

同

実行卿

2 いまぞきくみ谷がくれのふるすより梢にうつる鶯の声 (二七二)

初聞時鳥 俊頼朝臣

3 時鳥は山のすそを尋ねつつまださとなれぬ初音をぞきく (二七三)

水草初長 匡房

4 なには江のあしもまこも白菅もつのぐむ程はえこそみわかね (二七四)

池水初氷 紀伊入道

5 池水にやどれる月はくまなくてみぎはばかりぞ氷りそめける (二七五)

同座 隆資

6 うす氷今夜や池にとちつらむみなるをしの声も聞えぬ (二七六)

のごとく、「初聞鶯」「初聞時鳥」「水草初長」「池水初氷」「同座」の五つの歌題と六首の例歌が掲げられている。

次に、『一字御抄』（元禄三年版本）の「始初」の項をみると、「霞始聳」「氷―解」「花―開」「―聞郭公」「氷―結」「山水―氷」「江水―氷」「初鶯」「梅花始開」「水草―長」「初花」「卯花―開」「郭公―声」「初五月雨」「草花―開」「―鹿」「菊―開」「―紅葉」「山路―雪」のとおり、十九の歌題と二十一首の例歌を掲載しているが、このうち、『和歌一字抄』と符合するのは「水草初長」（例歌も一致）「初聞郭公」（例歌は不一致）の二つの歌題のみである。

次に、『明題拾要鈔』（元禄七年版本）の当該項目をみると、「初鶯」「初聞鶯」「梅始開」「梅花始開」「花始開」「初花」「初見花」「初郭公」「郭公初声」「始聞郭公」「初五月雨」「始見草花」「初雁」「初聞雁」「初紅葉」「初見紅葉」「氷初結」「山水始氷」「江水始氷」「初雪」「初恋」「弓場始」「射場始」のごとく、二十三の歌題と九十首の例歌に及んでいる。ちなみに、『和歌一字抄』とでは「初聞鶯」（例歌も一致）「始聞郭公」（例歌は不一致）の二つの歌

題が共通する一方、『一字御抄』とでは「花開」「山水始氷」「江水始氷」「梅花始開」「郭公初声」（以上、例歌も一致）「初聞郭公」「氷初結」「初五月雨」（以上、例歌が一首一致）「初鶯」「初花」「初紅葉」（以上、例歌は不一致）の十一の歌題が共通している。

このように、この種の類題集のなかでも三つの類題集には各々、異同が指摘され、それぞれ独自の属性が認められるのだが、就中、『明題拾要鈔』は歌題、例歌の両面で、他の二類題集を凌駕しているように憶測される。したがって、この際、『明題拾要鈔』を対象にして、その内容について少しく検討を加えてみることは、類題集の総合的研究を志向している筆者には少なからず意味を担ってくるのである。以下は、このような意味で、『明題拾要鈔』の成立についての粗雑な作業報告にしかすぎないが、大方のご批正を得たいと思う。

## 二 撰集資料

さて、『明題拾要鈔』の伝本を『国書総目録第八卷』（昭和四七・二、岩波書店）で検索してみると、

和歌百題拾要鈔 七卷七冊 ㊶明題拾要鈔 ㊶和歌 ㊶元禄七刊 ㊶内閣・静嘉・岡山大池田・東大（五卷五冊）・天理（三冊）

のとおりで、本書は元禄七年刊の版本のみで伝存し、その数も意外に少ないようである。なお、題簽と内題とでは書名を異にしている。ちなみに、本書は盛岡市中央公民館にも所蔵されており、いま当館の伝本（国文学研究資料館に所蔵のマイクロ・フィルムによる）によって、本書の書誌的説明を簡単にしておけば、次のとおりである。

所蔵者 盛岡市中央公民館 蔵

編著者 不詳

体裁 中本七冊 刊本

題 簽 新明題全集（後筆による） 和歌百題拾要鈔（本来）

内 題 明題拾要鈔

各半葉行数 半葉一四行（歌一行書）

総丁数 二七六丁（第一卷・三七丁、第二卷・三〇丁、第三卷・三二丁、第四卷・五〇丁、第五卷・三六丁、第六卷・四

八丁、第七卷・四三丁）

総歌数 六五〇〇首（第一卷・八二二首、第二卷・七二二首、第三卷・七四一首第四卷・一一九三首、第五卷・八六四首、

第六卷・一一四三首、第七卷・一〇二五首）

柱 刻 拾要鈔序 拾要目録一（一五） 拾要一一（一三〇） 拾要七目録一（一六） 拾要七一（一三七）

序 有（執筆者不詳）

刊 記 元禄甲戌（七年）曆三月日／書林 長谷川伝兵衛

本書の書誌的概要はおおよそ以上のとおりであるが、本書はいかなる和歌資料によって編纂されたのであろうか。次に、この問題について検討してみると、

7 いかなればながれは絶ぬ中川に逢瀬の数すくなかるらん

（稀逢絶恋・千載・藤原顕家・三七八四）

の7の詠歌に付された「稀逢絶恋」の歌題が示唆を与えてくれるようだ。すなわち、この7の詠は、『明題拾要鈔』の集付（出典注記）によって『千載集』を検すると、「希会不絶恋」の題のもとに掲げられて、『明題拾要鈔』の題と異同しているのので、『明題拾要鈔』がこの例歌を原拠資料の『千載集』から採録しているとは言えない背景が推測しうるのである。そこで、この7の詠を『明題拾要鈔』と同じ題のもとに掲載していると憶測される類題集に当

たってみると、『題林愚抄』『明題和歌全集』『類題和歌集』のいずれも原拠資料と同様の歌題のもとに、この歌を収載している。ただし、『類題和歌集』のみは、この7の例歌の直後の歌題に「稀逢絶恋」の題が連続し、教国の詠を例歌に掲げているのに対して、『題林愚抄』も『明題和歌全集』も「希会不絶恋」の題に連続するのは「絶後逢恋」の題で、その例歌の一首は『類題和歌集』と共通するが、「稀逢絶恋」の題も例歌も収録していないのである。ということは、『明題拾要鈔』で7の詠にふさわしからぬ「稀逢絶恋」の題が付されているのは、実は、『明題拾要鈔』の編者が7の詠に「希会不絶恋」の題を付すはずであったのに、うっかりしてその直後の「稀逢絶恋」の題を誤記した痕跡を残すものと憶測されるのではなからうか。

はたして、この憶測が正鵠を射えているか、否か、「祈恋」の歌題の例歌で検証してみよう。

8 幾夜われ波にしほれて貴船川袖に玉ちる物思ふらん (新古・撰政太政大臣〈良経〉・二二〇)

9 年も経ぬ祈る契は初せ山おのへの鐘のよその夕ぐれ (同・定家朝臣・二二一)

10 うき人の心もしらず我ばかり命あらばとみをいのるかな (新後撰集・前大納言実教・二二二)

11 つれなさもよしや祈らじ神だにも受ずは後の頼なければ (同・為世・二二三)

12 難面さを祈るとだにもゆふだすき懸てや人に先知せまし (新後拾・前関白太閤〈経教〉・二二四)

13 頼むとや祈れば神も思ふらん憂難面さにまけぬ心を (同・権中納言為重・二二五)

14 つれなしや祈るとすれど憂ことの有しに越る神のいかきは (新統古・実雅・二二六)

15 頼まじないのるにつけてうき事の手向にあける神の心は (為明・二二七)

16 人しれぬ我ねぎごとを頼む共いさやよるべの水の心は (法印慶運・二二八)

17 祈きて逢瀬しなくはきふね川神も空しき名をや流さん (左大臣〈義教〉・二二九)

18 貴舟河みそぎに袖は朽ぬ共浪の白ゆふ猶やかけまし (藤原資任・二三〇)

19 みのとがに思ひなす社恋せじのみそぎを受る印成けれ (雅縁・二三二)

20 いかにせん神の受けるみそぎとてみし俤も忘れ果なば (兼好法師・二三二)

21 住吉の松は祈もかひなきによしさは茂れ恋わすれぐさ (已上同・澄覚法親王・二三三)

22 朽はつる袖のためしとなりねとや人を浮田の杜のしめなは (六百番哥合・家隆・二三四)

23 貴舟川百瀬の時も分過ぬ、れ行袖の末を頼みて (同・寂蓮・二三五)

24 我ばかり祈ぞかくる神がきに引しめ縄のながき契りを (亀山殿七首・為藤・二三六)

25 我かけしぬさやかくらんちはや振神に祈し君にはあはず (玉吟・家隆・二三七)

この8～25の「祈恋」の例歌の収載状況を、三つの類題集間で調査してみると、『題林愚抄』も『明題和歌全集』も、8～14・22～24の十首は収録しているが、15～21・25の八首は収録していない。一方、『類題和歌集』(版本)は8～25の十八首の全歌を収載しており、この点から、『明題拾要鈔』の編者が「祈恋」の例歌を採録するに際して、『類題和歌集』を撰集資料にしたことはほぼ間違いないであろう。ちなみに、『明題拾要鈔』は「山樹陰晴」の題の例歌に、

26 夜と、もにはれずも有かな木隠て山人いかであくど知覧 (山樹陰晴・類・無名・二二八)

の26の詠を掲げているが、これは『東宮学士義忠歌合』の義忠の詠である。にもかかわらず、『明題拾要鈔』が出典を「類」、作者を「無名」としているのは、『類題和歌集』(版本)に集付は空欄、作者は「無名」としているのを、そのまま借用したからであろう。ここにまず、『類題和歌集』を『明題拾要鈔』の撰集資料の一つに想定することができようが、それでは、『明題拾要鈔』が参照した『類題和歌集』はいかなる伝本であろうか。この問題に

示唆を与えるのが実は、「栽梅」の題の次の例歌である。

- 27 植置し種はさすがに春やへて花ぞことしの宿のむめがえ  
(百首・道堅・二七二三)
- 28 軒近くうつし植ても梅のはなあかぬにほひを袖にしめつ、  
(親王御方・二七二四)
- 29 ふり果る身に社またね梅花植をく宿の春な忘れそ  
(続後拾・定家・二七二五)
- 30 心をばとめじと思ふ老がよにことしもはるのはなを植つ、  
(白川殿七百首・為家・二七二六)
- 31 君が経むみよのためとや梅花うへてちとせの春をまたまし  
(亀山殿七百首・為藤・二七二七)
- 32 おなじくは風のさそはぬ種もがなうへてときはに花を詠む  
(千首・耕雲・二七二八)
- 33 梢こそ中くみえね桜花まやのあまりに近く植つ、  
(同・為尹・二七二九)
- 34 風吹どうごきなきよの花の木を植て千年の春や待らん  
(同・雅縁・二九三〇)

すなわち、版本『類題和歌集』の「栽梅」のもとには例歌が掲載されていない、例歌を掲載しているのは題簽に『類題』とある伝本で、ちなみに、北海学園大学付属図書館北駕文庫蔵の写本には27・28の二首が掲載されているという具合である。ここに、『明題拾要鈔』の撰集資料となつたのは、北駕文庫などに伝存する『類題』(目録題は『類題和歌集』とする)であつたと推断できるであろう。

ところで、「栽梅」の題の29・34の六首については、『類題和歌集』は収載していないので、この六首の撰集資料に『類題和歌集』を想定することは不可能である。そこでこの六首の撰集資料を探索すると、29・31の三首は『題林愚抄』と『明題和歌全集』に収録され、また、32・34の三首は『一字御抄』(版本)に収載されているのである。ということは、これらの類題集が『明題拾要鈔』の撰集資料の候補にのぼることを意味しようが、まず、29・31の三首は『題林愚抄』と『明題和歌全集』のうちのいずれから採録されたのであろうか。この点を明らかにするのが

『明題拾要鈔』に注記された集付である。たとえば、次に掲げる、

35 さやかなる影もみましを春霞立るぞ月のつらさ成ける

(春月幽・題林・為道・一二三四)

36 山桜梢に残る程ばかり庭にもつもる花のしらゆき

(花半散・題林・光吉・二〇九二)

37 人しれず待たてる哉芦引の山より出るかつらおとこを

(立待月・題林愚抄・為忠・三六二四)

38 吹はらふ松にあらしのはげしともしらでや花の枝かはす覧

(花交松・題林・実教・三八一八)

の35～38の四首には、注記したとおり「題林」あるいは「題林愚抄」の集付を認めることができるが、「明題和歌全集」の集付はまったく見出すことができないのである。この実態は、『明題拾要鈔』ではこの35～38の四首が原拠資料の扱いしかなされていないことを意味しようが、しかし、『明題拾要鈔』の編者が依拠した資料としては、『明題和歌全集』ではなく、『題林愚抄』であることは間違いないことを意味していよう。このことから、『明題拾要鈔』の撰集資料の一つに『題林愚抄』を想定することは許されるであろう。

それでは、32～34の三首は『一字御抄』が撰集資料であろうか。この問題を究明するために、『明題拾要鈔』から「一」の字を含む歌題とその例歌を引用してみよう。

39 天地とわかれぬ先を今きけばかずの初を形とやせし

(一・基綱・六一八九)

40 こと花は匂はぬ沢に紫のひとむらごなる杜若かな

(杜若一叢・源仲正・六一九〇)

41 有明に春の光を残してもこぶかき花のいづくにかみん

(惜春非一・後柏一・六一九一)

42 ことにふれて名残はあるを花鳥の名にたて、行春の習よ

(政為・六一九二)

43 そをのみや名残と聞む廿余四方に移ふ花の春風

(為広・六一九三)

44 行春に思ひそへてぞ大かたの月日も更に驚かれぬる

(済継・六一九四)

- 45 限ありと暮行春をみるに猶哀数そふみをや思はん  
 46 一声をいかゞ恨ん郭公そをだにきかで待しこゝろに  
 47 郭公たゞ一声の名残だに雲のいづくに遠ざかりぬる  
 48 時鳥いかに鳴とか一声は同じねにだにたぐひなしとや  
 49 御祓する汀に風の涼しきは一夜を籠て秋やきぬらん  
 50 あかずのみ秋さく花のみゆる哉いく色になる心なるらん  
 51 我は猶をみなへし杜哀なれおのへの萩はよそにてもみん  
 52 秋くれば千々に心ぞ別れけるいづれの花もあかぬ匂に  
 53 色くの花咲けらし秋のゝはをく白露の名にやたがはん  
 54 駒なべて野べに立出て詠れば心くゝに花さきにけり  
 55 色くゝにみにしむのべの虫のねは千種の花に類ふ成けり  
 56 分行ば露の底なる虫のねをのべの千種の乱てぞ聞  
 57 つらにをくれ友をゝくらす心をば知す夜深き初雁の声  
 58 鳴てくるたゞ一声は人ごとに心をみするかりの玉づさ  
 59 いとはやも染て色こき紅葉哉此一本や先時雨けん  
 60 かぞふれば秋はけふ迄暮ぬめり野べのけしきは露も替らず  
 61 なれこしよ誰心なるけふのみと思ふ名残は憂秋もなし  
 62 けふといへば秋にぞかこつ朝良の花に懸こし露の恨を

(為孝・六一九五)

(郭公一声・円昭法師・六一九六)

(禅林寺殿七百首・範忠・六一九七)

(後柏一・六一九八)

(秋隔一夜・金葉・権中納言顯隆・六一九九)

(秋花不一・広綱・六二〇〇)

(範永朝臣・六二〇一)

(経衡・六二〇二)

(国房・六二〇三)

(義孝・六二〇四)

(虫声非一・拾玉・慈鎮・六二〇五)

(後柏一・六二〇六)

(初雁一声・亜槐・雅親・六二〇七)

(政為・六二〇八)

(紅葉一樹・続千・経信・六二〇九)

(秋唯一日・隆資・六二一〇)

(政為・六二一一)

(済継・六二一二)

63 いっしかと初秋かぜに山科の岡べのくるす朽は果らん

(一葉散林・国房・六二二三)

64 山川のいづくを床とゆふぐれはねに行鳥の独鳴らん

(一鳥過寒水・頓阿・六二二四)

65 雲鳥もかへる夕の山かぜに外面の谷の陰ぞ暮ぬる

(一溪雲鳥・玉葉・〈伏見〉院御製・六二二五)

66 世の為にもろ人あふぐ一こともかはらじ宿の敷島の道

(述懷非一・栄雅・六二二六)

67 をろかなるみ社うからめいつよりか老てふ事を歎そへけん

(政為・六二二七)

68 よはひ社中くうけれうき数をみにつくしては有もかひなし

(同・六二二八)

69 世をうらみあるは我みをうしと思人にいつかは心やすめん

(後柏一・六二二九)

70 みに過し昔をいへば思ひ出の数にも越て我ぞ老ぬる

(懷旧非一・続後拾・権中納言公雄・六二二〇)

71 我忍ぶ同じ心の友もがなその数ぐをいひてたゞさん

(新葉・後村上院・六二二一)

72 今はたゞ心にかけて聞ばかり須磨の浦波やつはしの跡

(千首・為尹・六二二二)

73 思ひ出と思ひおもはず数ぐに先しのばるゝ身の昔哉

(同・耕雲・六二二三)

74 はかなしと思ひ捨て忘れぬは一かたならぬ昔成けり

(同・宋雅・六二二四)

75 いくかへり老の末まで馴きつる春と秋とを思出にせし

(同・肖柏・六二二五)

まず、この39～75の三十七首のうち、『和歌一字抄』にみえるのが、40・50～54・60・63の八首であるのに対し、『一字御抄』は39～45・48～63・65・70の二十五首を収載して、これらの例歌は「一」および「不」の項にほぼ『明題拾要鈔』の配列順に従って収録されているのである。したがって、ここに『明題拾要鈔』の撰集資料の一つに『一字御抄』を想定することは許されようが、残念ながら、「郭公一声」の題の例歌は『一字御抄』には48の詠しか収載されていないので、「一」の字を含む歌題のすべての典拠に『一字御抄』を想定することは不都合と考慮

せざるを得ないであろう。そこで、「郭公一声」の題の46の詠と、「一鳥過寒水」題の64の詠、および「述懷非一」と「懷旧非一」の例歌である66・75の詠を収録する撰集を探すと、すでに撰集資料の一つに想定している『類題和歌集』に、これらの十三首はすべて収載されているのだ。これらの実態から、「一」の字を含む歌題とその例歌は、『一字御抄』と『類題和歌集』より採録されているという『明題拾要鈔』の撰集過程がここに知られるのである。それでは『和歌一字抄』は『明題拾要鈔』の撰集資料にはなっていないのであろうか。この問題を解決してくれるのが、「送」の一字を含む次の歌題と例歌である。

76 木の本に待し桜を惜むまで思へば遠きふる郷のそら  
(花下送日)・拾愚・定家・九八七

77 春ごとに咲ぬ散ぬと花をみてみの徒に老にけるかな  
(見花送日・橘為通・九八九)

78 露結ぶ秋の数のみ重ならば幾へか咲む白菊のはな  
(菊送多秋)・花園左大臣(有仁)・九九四

79 此比はまがきの菊に風ふれて宿のあるじの袖薫る也  
(風送菊香・新院(崇徳院)・九九六)

80 守山の嵐の伝に紅葉を誰思はずにみてしのぶらん  
(嵐送山葉・俊頼・一〇〇一)

すなわち、この五首は『和歌一字抄』の「送」の項に77・79・78・80・76の順で、歌題・詠作者ともに『明題拾要鈔』と同じように掲載されているからであるが、この憶測を確認させるのが、「松間桜」の題の

81 このはるはのどかに匂へ桜花枝さしかはすまつのしるしに  
(松間桜)・内大臣・四三四五

の81の例歌の作者表記である。なぜなら、この81の詠は『金葉集』(三八)にも掲載され、同集の作者表記は「左兵衛督実能」であるのに対し、『和歌一字抄』は「内大臣実能公 公実男」として、『明題拾要鈔』と符合するからである。なお、『明題拾要鈔』が「遠草漸滋」の題の

82 しがふべく成も行哉雉子鳴かたの、みの、おぎのやけ原  
(遠草漸滋・一字・無名・三四七五)

の82の例歌の集付に「一字」と注記しているのも、それが原拠資料の扱いになつてはいるものの、この憶測を裏付け、ここに『和歌一字抄』を『明題拾要鈔』の撰集資料の一つに想定しうるであろう。

次に、『明題拾要鈔』の撰集資料を想定するうえで示唆を与えるのが、「後京極」の作者名で掲載されている「昭君昔情」と「不契夕恋」の題の

83 つくぐくと馴し昔を思ふにもかゝみの影の猶つらき哉

(昭君昔情・後京極・四一五四)

84 しらざりつうつせばあらぬ姿にてこし路に沈むみとならむとは

(同・四一五五)

85 すがたをばかきたがへてし水茎ぞ此里までに袖ぬらしける

(同・四一五六)

86 さりともと待人いかゞ詠らんこの夕ぐれの入あひの空

(不契夕恋・後京極・五八九二)

の83・86の四首であろう。ちなみに、これらの四首は『秋篠月清集』には収載されていないので、詠作者の「後京極」は藤原良経ではなく、目下のところ、詠作者は不詳と言わざるを得ない。ところが、これらの四首は類題集『摘題和歌集』に題も作者表記もまったく『明題拾要鈔』のそれと同じように掲げられているので、『明題拾要鈔』の編者が『摘題和歌集』を参照した可能性は高いであろう。なお、『明題拾要鈔』には、次の

87 とりそへて植し桜の先咲て一木咲にぞ二木とは知

(花半開・摘・二〇九〇)

88 雨そゝぐ花たち花のいかなれば匂ひばかりのしほれざるらん

(雨夜摘・摘・二七七九)

の87・88の二首の集付に「摘」とあり、これは『摘題和歌集』のことであるから、この集付は原拠資料として『摘題和歌集』を扱ってはいるものの、ここに『摘題和歌集』を『明題拾要鈔』の撰集資料の一つとして加えることは許されるであろう。

このほか、『明題拾要鈔』の撰集資料として候補にのぼるのが、次の

89 立のぼる霧より下の籬より又あらはるゝ庭の紅葉ゝ

(紅葉出垣)・続撰吟・雅世・一五)

90 咲ぬまに心をやりてみる時ははや散過て花もなかりき

(花未開・続撰吟・雅親・一五〇)

91 吹かぜはよその軒ばに咲梅も只こゝもとに匂ひきにけり

(戸外梅・続撰吟・逍遙・五一二)

92 春わかみ霞もとぢぬ柴のとは松のあらしや吹はらふらん

(戸外春風・続撰吟・雅世・五一三)

の89・92の詠の集付に「続撰吟」とみえる『続撰吟抄』であろう。ここには『続撰吟抄』は原拠資料の扱いとしてみえているが、集付に出典注記のみえない次の

93 思ふにもいく浦山をしのごし心やかたるはつかりの声

(遠天旅雁・後柏・一六四〇)

94 物思ふ雲のはたての夕月夜よをへて増る影はみゆらん

(逐日増恋・同(後柏)・一〇二九)

の93・94の二首が『続撰吟抄』に収録されており、このような事例はほかにも数多見出しうるので、『続撰吟抄』を『明題拾要鈔』の撰集資料の一つに数えることは許されよう。

そのほか詳細に検討を加えるならば、『明題拾葉鈔』の撰集資料に想定しうる作品はまだまだ探索できるかも知れないが、おおよそのところは以上言及した作品にほぼ尽きるように推断されよう。となると、『明題拾葉鈔』の最大の撰集資料は北駕文庫などに伝存する『類題』(目録題には『類題和歌集』とある)であり、次いで『一字御抄』が続き、そのほか『和歌一字抄』『題林愚抄』『続撰吟抄』『摘題和歌集』などの類題集がその主要な撰集資料であったと想定することができるであろう。

### 三 内 容——詠歌作者と原拠資料

さて、『明題拾要鈔』の撰集資料は以上のごとくだが、それでは『明題拾要集』にはいかなる歌人の詠歌が収載

されているのであろうか。そこで、この問題を検討してみると、詠歌作者が判然としない詠歌がいくらかある。

すなわち、次の「弓張月」「花廻年友」「低」「風伝隣花」「見返事無字恋」の題の、

95 月をまづ弓張としもいふことは山のはさして入にぞ有ける (弓張月・二八五)

96 契ありて住宿からの花なれば咲て幾世の春か知せん (花廻年友・七七七)

97 氷るらし松はうれ葉も音なくて風にしられぬ雪の下枝は (低・一七八六)

98 桜散となりにとふ春風は花なき里ぞ嬉しかりける (風伝隣花・二〇四五)

99 浜千鳥あとなき浦は中／＼に見せずは袖もしほれざらまし (見返事無字恋・二二二五)

の95～99の五首には『明題拾要鈔』は集付はもちろん、作者注記も付しておらず、また、次の「残雪半蔵梅」題の

100 にしこそと秋みし梅の同じ枝を分て残れる雪に咲らん (残雪半蔵梅・二〇八九)

の100の詠には「無名」の作者注記があるが、「無名」の注記を載せる『和歌一字抄』には収載されないので、作者不明歌となろう。

また、一般的な官職名を記すのみで、集付を欠くものに、「御製」として、

101 我せこがけふのみあれの葵ぐさ懸そふ露の玉かづら哉 (挿葵・御製・一三八九)

102 はかなしや知れずしらであすか井の浅からぬまで契る心は (不知名恋・御製・二一八六)

103 山ふかみ浮世の外にすむ月は秋の哀のきはもをよばず (山中月・御製・二五四七)

104 さすが又ねをや鳴けん空せみのからき心の行衛なりけり (辞後会恋・御製・二九〇七)

105 さゆる夜もみはならはしの物とてや床は河瀬の網代守らん (網代寒・御製・四七〇五)

106 我かたもさぞ霞むらん夕まぐれ向ひの里の遠ざかり行 (霞満山・御製・五〇七二)

107 倂も残らずかすむ妹が島かたみのうらは名のみなりけり  
 の101 107の七首があり、また、「関白皇太子博」として、

(孤島霞・御製・五六六九)

108 よしの川岩本ざくら咲にけり峰よりつくく花の白雲

(花満山路・関白皇太子博・五〇八〇)

109 何かたに色増らん紅葉に朝日夕日の影ぞうつろふ

(東西紅葉・関白皇太子博・六三八四)

の108 109の二首があり、また、「前関白左大臣」として、

110 かぜ渡る梢はるかに鳴せみの声も涼しくはるゝあま雲

(風渡蟬声遠・前関白左大臣・六二五)

111 我ながら散をや人に忍ぶ覧かすめる花に春かぜぞ吹

(霞中落花・前関白左大臣・二四九四)

の110 111の二首があるほか、「前内大臣」「菅宰相」「相国入道」として、

112 すみ増る秋もこそあれみるまゝに霞かたぶく春のよの月

(春月幽・前内大臣・一二三二)

113 おほつかな誰まつ虫の思ひぐさしげみの中の露に鳴覧

(虫声滋・菅宰相・五四五三)

114 あきらけき昔の御代の跡みせて書をくふみや鏡成覧

(披書知昔・相国入道・五七〇六)

の112 114の各一首があつて、各々、固有名詞は分明でない。

したがって、『明題拾要鈔』の総歌数の六千五百首から二十首を減じた六千四百八十首が、いかなる歌人の詠歌で占められているかを調査したところ、『明題拾要鈔』に二十首以上の収録をみた歌人は次のとおりである。

『明題拾要鈔』の二十首以上の収載歌人

1	後柏原院(勝仁親王)	615 首	4	政 為	229 首
2	実 隆(堯空)	544 首	5	慈 円	182 首
3	師 兼	239 首	6	定 家	157 首

24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
顯季	為尹	清輔	西行	順徳院	雅縁 (宋雅)	雅世	雅親 (栄雅)	雅経	公条 (称名院)	為広 (宗清)	良経	頼政	済継	頓阿	為家	家隆	俊頼
55 首	57 首	60 首	61 首	62 首	64 首	70 首	74 首	78 首	87 首	93 首	96 首	99 首	100 首	102 首	117 首	118 首	155 首
42	39	39	39	38	36	36	35	33	33	32	31	30	29	28	27	26	25
匡房	為世	後宇多院	讃岐 (二条院)	隆祐	正徹	小侍従	経信	範宗	後嵯峨院	寂蓮	基綱	為氏	為孝	後鳥羽院	俊成	行宗	耕雲 (長親)
23 首	25 首	25 首	25 首	26 首	31 首	31 首	32 首	34 首	34 首	36 首	42 首	43 首	46 首	49 首	50 首	52 首	53 首

42	伏見院	23 首	44 実氏	20 首
44	長明	20 首		

この整理から、『明題拾要鈔』に収載される歌人の第一は、後水尾院歌壇で尊崇された後柏原院・実隆・政為を初め、済継・為広（宗清）・公条（称名院）・雅親（栄雅）・為孝・基綱などの室町後期の歌人が圧倒的位置を占め、次いで、師兼・頼阿・為尹・正徹・雅縁（宋雅）・雅世・耕雲（長親）などの南北朝期から室町前期かけての歌人と、慈円・定家・家隆・良経・雅経・西行・俊成・後鳥羽院・寂蓮・小侍従・讃岐（三条院）・長明などの新古今時代の歌人が拮抗して並ぶなか、俊頼・頼政・清輔・顕季・行宗・経信・匡房などの院政期の歌人がその後に関連している。そうして、為家・後嵯峨院・隆祐・実氏などの後嵯峨院歌壇の歌人、順徳院・範宗などの順徳院歌壇の歌人、為氏・後宇多院・為世・伏見院などの後宇多院・伏見院時代の鎌倉中期以降の歌人がその後に並んでいる。『明題拾要鈔』に収載される主要歌人の収録状況は以上のとおりであるが、ちなみに、十九首以下の収載歌人を列举するならば、以下のごとくである。

〔十八首収載される歌人〕	従二位為子・後土御門院
〔十七首収載される歌人〕	実朝・肖柏
〔十六首収載される歌人〕	公実・行家・為道・為定・読人不知
〔十五首収載される歌人〕	白河院・宗尊親王・公雄・雅永
〔十四首収載される歌人〕	仲正・有家・為藤・雅俊
〔十三首収載される歌人〕	実教・雅有・光俊・为重・後花園院
〔十二首収載される歌人〕	土御門院・基俊・為教・為明・永福門院

〔十一首収載される歌人〕 範永・隆信・実定・実行・国基・基忠・為遠・冬平・後醍醐院・貞常親王

〔十首収載される歌人〕 有仁・忠通・関白〔和歌一字抄〕・源顕仲・信実・龜山院・為兼

〔九首収載される歌人〕 嘉言・経衡・兼氏・兼実・兼宗・後伏見院・資季・実経・崇徳院・宗良親王・仲実・

道嗣

〔八首収載される歌人〕 永源・家経・経継・顕朝・実泰・実雄・俊成女・長実・道家・肥後〔二条太皇太后宮〕

・良暹

〔七首収載される歌人〕 為義・顕昭・顕輔・公経・後二条院・実兼・通親・貞時・内侍〔永福門院〕・頼家・

隆親・隆博

〔六首収載される歌人〕 為実・為冬・家良・具氏・経家・経任・後小松院・国量・国助・秀能・女房〔広綱歌

合〕・親長・知家〔蓮性〕・忠度・道堅・良実

〔五首収載される歌人〕 為理・花園院・宮内卿・教実・教秀・堯孝・顕氏・後京極〔摘題和歌集〕・光厳院・

後光厳院・公相・師継・資仲・資平・守覚法親王・小宰相〔土御門院〕・宋世・忠房・定為・道助法親王・

範兼・邦省親王・無名〔和歌一字抄〕・隆源

〔四首収載される歌人〕 為経〔寂超〕・為相・為忠・家賢・雅言・家長・義満・御匣〔式乾門院〕・慶運・経平

・経房・兼澄・源縁・元輔・公蔭・公親・後奈良院・公明・国信・国冬・師賢・式子内親王・俊恵・俊忠・

進子内親王・盛方・禅空・宗成・忠守・通俊・通成・道済・邦高親王・頼実・頼宗・良教

〔三首収載される歌人〕 為基・為信・為親・為成・為敦・雅兼・雅光・雅康・雅定・家房・下野〔四条太皇太

后宮〕・徽安門院・義教・季広・義孝・基氏・儀子内親王・季春・義詮・堯胤・教国・教長・教良・経教・

經嗣・賢阿・兼行・兼好・兼昌・顯仲女・兼良・光吉・公賢・康資王母・公重・幸清・高倉院・後村上院・公忠・公通・高定・公任・後白河院・光明院・国房・伊勢大輔・時綱・師時・師実・実継・実俊・実房・実明女・師房・重家・俊宗・少将内侍（後深草院）・親雅・新宰相（延政門院）・親子・深守法親王・親盛・帥・崇光院・成方・盛房・宣胤・宣子・千里・宗秀・尊道法親王・大進・忠良・通顯・定親・貞成親王（式部卿親王）・道玄・冬隆・登蓮・能宣・範忠・文逸・有光・有忠・頼氏・冷泉

〔二首収載される歌人〕 按察（鷹司院）・為季・為顯・為富・永胤・永実・越後（内大臣家）・越前・雅家・家基・覚延・雅綱・覚寛・覚誉法親王・雅実・雅清・河内（前齋院）・基家・義持・義尚・義政・基任・克覚・教定・教頼・近衛院・具行・堀河院・惠慶・慶範・顯家・兼弘・顯親・顯統・後円融院・公雅・公教・後堀河院・広経・行慶・行濟・公資・公時・公守・公宗・公宗母・公条・公清・光盛・行能・国夏・国道・惟繼・斎宮女御・采女・在良・三宮・師教・資賢・師光・師時・師重・師俊・師忠・資任・資有・師良・実伊・実遠・実音・実家・実雅・実衡女・実重・実淳・実冬・実能・実方・二条院・寂惠・俊綱・少将（藻壁門院）・小弁・常陸・師頼・親房・新右衛門督（宣光門院）・信量・正家・成久・成元・性助法親王・清成・是則・宣旨（六条齋院）・禅信・善成・禅隆・宗久・宗継・宗宣・相模・尊応・尊氏・泰時・大夫典侍・大輔（殷富門院）・達智門院・丹後（宜秋門院）・忠季・忠教・忠嗣・澄覚法親王・長岡・長綱・定成・定房・定頼・道永・道興・道性・道良女・内実・能因・範憲・範長・万秋門院・弁内侍・法皇〔石間集〕・法守法親王・邦長・右衛門督・右京大夫（建礼門院）・有綱・有房・頼重・頼輔・隆資・隆俊・隆長・隆房・隆弁・良基・良通

〔一首収載される歌人〕 按察使・安成・阿仏尼・安法・為業・為景・為嗣・為時・為秀・為照・為清・為宗・

一条(花園院)・一条(昭慶門院)・為仲・為平・為邦・為茂・為有・為賴・院〔千首〕・運円・永縁・永雅  
 ・永基・円昭・円玄・延光・円勇・壞円・懷国・覚恵・覚性法親王・覚忠・家源・花山院・家持・家実・雅  
 正・雅通・雅忠・雅明・下野(後鳥羽院)・観意・貫之・紀伊・義運・季経・宜秋門院・義重・義将・義政  
 ・雅成親王・義忠・基長・義通・基平・季保・基輔・基房・基祐・基隆・躬恒・久明親王・堯雅・堯教・興  
 行・堯尋・業清・教良女・近衛(今出川院)・欣子内親王・九条前内大臣〔和歌一字抄〕・堀河(待賢門院)  
 ・慶基・経顕・経光・慶暹・経宗・経則・経忠・経朝・景房・経有・慶融・月華門院・兼経・兼光・兼康・  
 兼綱・顕綱・憲実・賢俊・賢助・源承・兼盛・兼朝・元長・権大納言(昭訓門院)・権大納言(後二条院)・  
 元任・顕房・顕明・顕隆・賢良・元良・後一条院・行胤・公基・公継・孝継・公経女・公顕・広言・広公・  
 光行・公綱・広綱・孝行・公衡・綱光・康光・光之・行氏・光実・公種・行重・公俊・行俊・行親・光成・  
 行盛・康成・康盛・公禅・孝善・高倉(八条院)・公宗女・行尊・好忠・公朝・公澄・光任・公能・公敏・  
 公保・恒明親王・国行・国助女・伊家・伊経・伊長・伊通・伊平・伊房・在匡・左京大夫(永福門院)・西  
 住・斎信・朔平門院・師季・持季・時季・式部・氏久・資教・師経・師光・資康・氏綱・時広・時綱・紫式  
 部・師実・師信・治仁王・時昌・師成・時清・資宗・時村・資藤・実為・持通・実基・実量・実源・実衡・  
 実国・実之・実資・実守・実秋・実秀・実承・実政・実性・実忠・実貞・実任・実文・実瑜・二品局・持文  
 ・持方・時房・資房・資明・若上郎・寂真・州覚・重経・重綱・重氏・重治・重如・種成・秀長・修範・重  
 文・秀房・周防内侍・秀茂・種光・出雲(前斎院)・守誉・俊家・俊賢・俊長・俊定・俊豊・俊房・俊明・  
 浄意・承覚法親王・少将(邦省親王家)・少納言(後伏見院)・浄弁・少輔・勝命・助成・師良・師量・信家  
 ・心海・親教・信兼・親行・真昭・新大納言・親忠・信定〔慈円とは別人〕・親範・崇明門院・政家・清家

・清雅・正季・聖覺法親王・靜賢・成光・清時・濟時・成実・成助・清正・政世・政宗・成宗・政村・清忠  
 ・政長・成道・盛徳・成房・成茂・赤染衛門・節信・前関白左大臣〔石間集〕・前左大臣〔石間集〕・素意  
 ・増運・宋縁・宗行・宗康・宗時・宗信・宗泰・宗長・宗通・宗定・宗房・則季・則長・則祐・素暹・尊胤  
 法親王・尊海（真光院）・大式（太皇太后宮）・大藏卿・大納言典侍（後一条院）・但馬（藻壁門院）・筑後  
 （二条関白家）・忠経・忠元・忠光・仲光・仲綱・忠盛・忠命・忠隆・長淳・朝信・長清・朝仲・直親・直  
 明王・通応・通雅・通具・通光・通氏・通秀・通宗・通忠・通能・通房・通陽門院・定円・定教・定経・定  
 継・貞光・貞行・貞康・定綱・定資・定秀・定助・貞俊・貞宗・貞長・貞敦・貞輔・内侍（院中納言）・道  
 意・道因・道円・道我・道教・道綱・道昭・道勝・藤大納言局・冬通・道典・道平・道命・冬良・敦家・敦  
 教・敦経・頓宗・敦仲・内嗣・能基・能清・能誉・範家・範光・範玄・項子・美濃（皇后宮）・兵衛（達智門  
 院）・兵衛内侍・別当典侍（新院）・峰忠・邦道・保季・輔弘・輔親・満季・満政・満済・満詮・無窓国師  
 ・無品親王・明快・明衡・明信・右衛門佐・祐夏・遊義門院・有教母・祐盛・有宗・有長・祐茂・頼元・頼  
 康・頼綱・頼成・頼通・頼貞・隆淵・隆教・隆経・隆賢・隆康・隆国・隆氏・隆昭・隆朝・隆方・隆頼・良  
 兼・良心・良平・冷泉前大納言・六条宮・六条殿・和氏・和泉式部

『明題拾要鈔』に収載される詠作者は以上のとおりだが、それでは、これらの詠作者の歌が収録されている原拠  
 資料は何であろうか。この問題については、幸いなことに、『明題拾要鈔』には集付（出典資料）が付されているの  
 で、その集付を中心にして、集付に無注記の詠歌でも出典を探しえた場合は、それも含めて列挙すれば、次のとお  
 りである。

〔勅撰集など〕 古今集・後撰集・拾遺集・後拾遺集・金葉集・詞花集・千載集・新古今集・新勅撰集・続後撰

集・続古今集・続拾遺集・新後撰集・玉葉集・続千載集・続後拾遺集・風雅集・新千載集・新拾遺集・新後拾遺集・新続古今集・新葉集

〔私家集〕 赤染衛門集・顯季集・清輔集・散木奇歌集・行宗集・長秋詠藻・頼政集・山家集・小侍従集・寂蓮

集・秋篠月清集・長明集・金槐集・二条院讃岐・拾遺愚草・明日香井和歌・拾玉集・土御門院御集・郁芳三

品集・玉吟集・後鳥羽院御集・順徳院御集・隆祐集・瓊玉集・石間集・為家集・隣女和歌集・為世集・草庵

集・続草庵集・草根集・卑懷集・亜槐集・一人三臣和歌・済継集・碧玉集・柏玉集・雪玉集・称名院歌集

〔私撰集〕 後葉集・和漢兼作集・藤葉集・続撰吟抄

〔定数歌〕 堀河百首・永久百首・御室五十首・光台院五十首・白河殿七百首・弘安百首・嘉元百首・伏見院三

十首・文保百首・龜山殿七百首・延文百首・信太杜千首・耕雲千首・永徳百首・師兼千首・為尹千首・宋雅

千首・文安御百首・雅永十首・雅永三十首・雅世三十首・義尚千首・藤川五百首・基綱三十首・永正九年道

堅三十首・道堅百首・為広千首・肖柏千首・実隆三十首・実隆五十首・称名院百首・称名院千首

・三光院千首

〔歌会歌〕 永正元年九月十三日内裏御会・文安三年七月二十二日内裏続歌・文安四年八月十一日内裏御続歌・

畠山匠作亭詩歌・文明七年歌会・文明十一年六月三日御靈社法楽・永正六年御着到和歌・夢想愛宕法楽

〔歌合歌〕 東宮学士義忠歌合・広綱歌合・法性寺殿歌合・治承二年八月歌合・六百番歌合・新宮撰歌合・建仁

撰歌合・建保元年閏九月歌合・建保二年歌合・建保四年八月二十四日歌合・文永二年歌合・石清水歌合・康

永詩歌合・年中行事歌合・日吉社大宮歌合・仙洞歌合・内裏九十番歌合・文明十三年九月一日歌合・文明十

## 四日詩歌合・二十五番歌合

〔類題集〕 和歌一字抄・摘題和歌集・題林愚抄・類題和歌集

以上が『明題拾葉集』の収載歌の原拠資料だが、予想外の少なさである。とはいえ、ここで改めて『明題拾葉集』に収載される詠歌作者と原拠資料について、上位三十五位を掲げると、次のとおりである。

- |             |             |                |             |             |
|-------------|-------------|----------------|-------------|-------------|
| 1 後柏原院『柏玉集』 | 2 実隆『雪玉集』   | 3 『師兼千首』       | 4 政為『碧玉集』   | 5 慈円『拾玉集』   |
| 6 定家『拾遺愚草』  | 『拾遺愚草員外』    | 7 俊頼『散木奇歌集』    | 8 家隆『玉吟集』   | 9           |
| 『為家集』       | 10 頼阿『草庵集』  | 『続草庵集』         | 11 『済継集』    | 12 『頼政集』    |
| 14 『為広卿集』   | 15 公条『称名院集』 | 16 雅経『明日香井和歌集』 | 17 雅親『亜槐集』  | 18 『雅世集』    |
| 19 雅縁『宋雅千首』 | 20 『順徳院御集』  | 21 西行『山家集』     | 22 『清輔集』    | 23 『為尹千首』   |
| 24 『顕季集』    | 25 『耕雲千首』   | 26 『行宗集』       | 27 俊成『長秋詠藻』 | 28 『後鳥羽院御集』 |
| 29 『公宴続歌』   | (為孝)        | 30 『為氏卿集』      | 31 基綱『卑懷集』  | 32 『寂蓮法師集』  |
| 『宝治百首』      | (後嵯峨院)      | 33 範宗『郁芳三品集』   | 35 『経信集』    |             |

## 四 編纂目的——歌題の問題など

さて、『明題拾葉集』における原拠資料と詠歌作者の問題については、以上の論究のとおりだが、それでは、『明題拾葉集』における歌題の問題はいかなるものであるうか。この点については、「一 はじめに」で多少言及し、『明題拾葉集』に収録の歌題が『和歌一字抄』や『一字御抄』に比して、かなり大規模に蒐集されている実態を明

白にしたが、ここで改めて歌題の問題について検討してみよう。

そこで『明題拾要鈔』の巻一の冒頭の歌題を掲げてみると、

鶯出谷 暁出月 夕出月 出山月 月出山 松月出山 紅葉出垣 初言出恋 言出恋

詞出恋 隠士出山 漁父出浦 出湯

のとおりで、「出」の字を含む結題を十三題掲載している。ちなみに、これを『一字御抄』と比較してみると、『一字御抄』は「鶯出谷」「暁出月」「月出山」「松月出山」「紅葉出垣」「隠士出山」の六題しか収録しておらず、ここに『明題拾要鈔』の内容面での充実ぶりが証明されるであろう。したがって、以下に『明題拾要鈔』の各巻に収録されている実字および虚字一字を列挙して、歌題面からみた『明題拾要鈔』の内容の紹介に及んでおきたいと思う。

〔巻一〕 出 入 到 何 色 戴 言 忿 厭 賤 未 祈 傷 嘶 遙

恥 張 掃 晴 初 早 端 似 勾 外 綻 細 隔 時 遠 留

所 問 採 飛 封 解 友 伴 与 鎖 共 趣 冒 及 収 度 (四十二項目)

〔巻二〕 近 契 散 誓 兩 自 遲 送 逐 各 趣 冒 及 収 度

忘 分 別 纔 弁 若 陰 幽 藏 隱 帰 挿 語 懸 変 重

兼 難 方 悲 枯 数 刈 傍 爲 適 高 低 闌 比 (三十九項目)

〔巻三〕 依 横 呼 寄 従 尋 立 誰 対 爲 適 高 低 闌 比

互 違 底 染 添 聳 背 敬 連 告 尽 伝 積 摘 常 眠

妬 半 長 馴 鳴 猶 名 無 慰 靡 流 成 乍 並 欲 生

(四十七項目)

〔卷四〕

被空向滿迎結閨恨裏浮寫移埋栽上

濕疎失疑薄歌搖打愁後殘臨望昇延思

多惜落驚帶老重折隴掩叢悔覲暗碎朽

〔卷五〕

漸休易破待每增稀交勝又招迷護全

負興深經吹踏臥古情如戀越竈混期宴

〔卷六〕

間明新遇逢遊荒爭淺愛憐余洗厚當

非遍暖鮮顯白覺寒盛夾先曝榮避礙妨

叫障遮呀聞來消清吟嫌行讓廻珍見滿

短乱漲閑隨忍知滋頻滴凌辞卜親

(六十一項目)

〔卷七〕

映久独曳光披隙響催翫下求物漏脆

不欲過涼冷少透澄已〔七色〕青黃赤白黑

綠紫〔數字〕一二三四五五六七八九十〔終日終

夜〕

終日終夜〔對字〕遠近貴賤都鄙憂喜是非遲速香色東西

南北朝暮昼夜左右晴陰高低淺深山野親疎縉素視点紅白

〔重字〕処々色々家々年々季々夜々日々時々離々朧々念々

(四十七項目)

(三十四項目)

村々 茫々

(七十六項目)

以上、卷一から卷七までに、虚字および実字を一字含む結題を中心として、それに「数字」「対字」「重字」などを含む結題が添加されて、都合三百四十六項目が掲載されている実態が明らかになったが、これらの三百四十六項目にわたる大量の歌題が何故に七卷に分類して収録されているのかを考えてみるに、歌題の中心となる虚字ならびに実字を、いろは順に配列した結果であるように推測される。すなわち、卷一は「い」「と」、卷二は「ち」「か」、卷三は「よ」「な」、卷四は「ら」「く」、卷五は「や」「て」、卷六は「あ」「し」、卷七は「ゑ」「す」および「五色」「数字」「終日終夜」「対字」「重字」のとおりで、分量的にみてバランスよく分割されていると言えようか。

ところで、配列原理が分明でない『和歌一字抄』や、『夫木抄』の雑部の配列を参考にしたとも憶測される『一字御抄』の配列の方法とも異なっており、単純にいろは順のもとに歌題を並べている『明題拾要鈔』の編纂目的は、いったい何であったのであろうか。この問題を考慮する際に示唆を与えるのが、『明題拾要鈔』の冒頭に掲げられている筆者不詳の以下の序文である。

やまと哥は題を求て詠ずるをよしとす、と中比の先達申されき。それよりこのかた世々にかさなりて、浜の真砂の数くになむ及べり。中にも、結び題の内には、虚字あり、実字あり。虚字はその心をよまでもありぬべし。実字は其文字の心を深く思ひ入てあらば、その心をあらはにのみ、あるはまはしなどして読に、たやすからぬにて、題の内に、実字たらむ文字を一処にあつめ、かれこれにかよはして、その心を玩味すべき為に、全部七冊、なづけて『明題拾要鈔』といふになむありけらし。

すなわち、この序文には、結題の歌を詠むに際して心得ておかねばならない要点について、現代文法の特に名詞

に相当する実字と、同じく動詞・形容詞などに相当する虚字の視点から、結題を分類し、本書の編纂目的を「虚字はその心をよまでもありぬべし」との認識から、「題の内に、実字たらむ文字を一処にあつめ」、「そ（結題）の心を玩味すべき為」としている。そして、このような分類意識で各々の結題を配列している背景には、「やまと哥は題を求て詠ずるをよしとす」という、和歌を詠作する際の基本は題詠歌を詠むことだという姿勢（根本精神）が認められるので、この点にも『明題拾要鈔』の編者の編纂目的が顕著に示されているように憶測されよう。すなわち、『明題拾要鈔』に収録される結題がいろは順で配列されているのは、和歌を詠作する人びとへの実用的情報提供という、言わばサービス精神の表れであって、ここに他の二類題集とは性格を多少異にしている『明題拾要鈔』の属性が指摘できるように思われる。

ただし、『明題拾要鈔』の歌題を吟味してみるに、先に示した結題のなかの一字を概観しただけで、序文で「実字たらむ文字を一処にあつめ」と言及されている趣旨とはかなり異同しているようだ。それは、たとえば、巻一では「出」「入」「到」「載」などの虚字が大半を占めるなかにあつて、「何」「色」などの実字はほんのわずかしは認められないという実態に如実に窺知されるであろう。しかし、これらの実字、虚字を含む歌題の種類は、「はじめに」で「始初」の一字を含む歌題を列挙した事例や、本節の冒頭で「出」の一字を含む歌題を掲げた事例ですでに明らかにしたので、ここでは改めて言及しないが、『明題拾要鈔』が収録する歌題の数量が、他の二類題集をはるかに凌駕している点に、『明題拾要鈔』の歌題面からみた特色を認めることはできるであろう。

## 五 成立の問題

ところで、『明題拾要鈔』の成立については、若干問題がありそうである。というのは、福井久蔵氏『大日本歌

『書綜覧上巻』（昭和四九・五、国書刊行会）には、

百題拾要鈔 十巻 後水尾院 / 一字御抄を改題せるもの。結題中に含める虚字を、いろは順に列ね、各題に数首の証歌を載せたるもの。例へば鶯出谷、鳴鶯入霞、春到氷解等に於けるが如し。終には数字対字重字の題、及証歌を載す。元禄四年に上板す。

のごとき記事を載せる一方、同書は、各々、

和歌明題拾要鈔 七巻 / 頓阿後柏原院等の詠数千首を類題とす。元禄七年以上板す。

和歌明題拾要鈔 七巻 / 頓阿、後柏原院、雅俊、堯雅、為家、伏見院等の詠歌数千首を歌題のいろは順に編みたるもの。上に歌題、次に原集の名、歌、その下に作者名を挙げたり。元禄七年出版。

の記事を載せ、『百題拾要鈔』と『和歌明題拾要抄（鈔）』を同一書とはみなさず、別書の扱いをしているからである。しかも、『百題拾要鈔』を、『一字御抄』を「改題」した作品で、編者を後水尾院としているのである。ちなみに、『大日本歌書綜覧上巻』は『一字御抄』について、『一字御抄』二巻 同（後水尾院）／天地山海より鳥獣虫魚に至るまでの結題を八門に分ち、いろは順に列ね、証歌を載す。八巻本あり。元禄三年上板す」と記すが、『一字御抄』に連続する書目に『百題拾葉 八巻』を掲げ、これを「前書の広本なり」と解説しているのは、『百題拾要鈔』を『一字御抄』の増補本とみなしているからであろう。

そこで、改めて『明題拾要鈔』の書誌に言及すると、『国書総目録第八巻』に「和歌百題拾葉鈔 七巻七冊 明題拾要鈔……」と記述されているように、『明題拾要鈔』は題簽と内題を異にしているのである。たとえば、三原図書館蔵の当該書（九一一・一〇八 G-1）は、題簽を「和歌百題拾要鈔一 伊行」、目録題を「百題拾要鈔一目録」、内題を「百題拾要鈔一」とするが、岡山大学付属図書館池田家文庫蔵の該本（九一一・一四一五三）は、題簽を「和

歌百題拾要鈔」、内題を「明題拾要鈔」として、表題を異にしている。なお、本稿の底本とした盛岡市中央公民館蔵の該本（普シ）は、題簽を後筆で「新明題全集一」と補填しているので、本来の表題が分明でないが、目録題は「明題拾要鈔一 目録」、内題は「明題拾要鈔一」となっている。

このように、『明題拾要鈔』には別名として「和歌百題拾要鈔」なる書名もあるために、『大日本歌書綜覧上巻』はうかつにも誤りを犯してしまったのであろう。ところで、本書の書名の由来については、『書陵部和漢図書分類目録 二』に、

百題拾要鈔 一名一字御抄 後水尾天皇 元禄四年版 二冊 一五〇 六三四

なる記事があるので、元来、「百題拾要鈔」であつたものが、何かの事情で「和歌百題拾要鈔」となり、さらに「明題拾要鈔」と改称されたと憶測される。

ところで、『書陵部和漢図書分類目録』にも「百題拾要鈔 一名一字御抄」の記事があつて、『大日本歌書綜覧上巻』の「一字御抄を改題せるもの」の見解を踏襲しているが、『図書総目録』にも「百題拾葉鈔→一字御抄」なる指示があつて、「一字御抄 八卷八冊」の項目をみると、「元禄四版―宮書（改題本「百題拾葉鈔」、二冊）」なる記事を掲げている。ここに、『明題拾要鈔』が後水尾院撰『一字御抄』の改題本であるのか、否かの検討を、いま一度試みてみることはあながち無意味でもないように思われる。ちなみに、この問題は「一 はじめに」で、「出」の一字を含む結題を例に引いて検討を加え、両者の間に異同が認められる実態を指摘しておいたが、ここで改めて検討してみよう。

そこでここでは『明題拾要鈔一』から「入」の一字を含む歌題（結題）と例歌を次に引用してみよう。

115 ねぐらにと梅が、とめて鶯の霞をわくる夕ぐれのことゑ

（晩鶯入霞・道堅・三二）

- 116 思ひそふねやもる月の影に又猶いひしらぬ梅が、ぞする  
 117 桜花こすのまとをり入からに散さへけさは払はでぞみる  
 118 をしあての匂ひばかりもこすの内に花とはいはん花ぞ散くる  
 119 玉簾吹しく風に散とみてあるべき花の袖にとまれる  
 120 色もかもこすのあみめやあらかりし花吹とをす軒の春風  
 121 さそひきてこすの内にも散花の錦のしとね風ぞ敷ける  
 122 さそふをも誰ゆるせばか玉だれのひま求くる花の下風  
 123 さそひこばよし玉だれの内外なく花にゆるさん春の山風  
 124 こすの内の雪に恨のかつ消て思ひし花のはる風もなし  
 125 小夜ふかき岩井の水の音聞ば結ばぬそれでも涼しかりけり  
 126 けふよりはこすのまとをる秋風もみにしむ計成にける哉  
 127 垣ほより萩のしげみを伝ひきてこすのま寒き秋風ぞ吹  
 128 村雨の野分の露の玉簾そでに吹まくあきのゆふかぜ  
 129 玉すだれひま求てや入つらんね覚かなしきとこの秋かぜ  
 130 すゝたれの内さへ匂ふ蘭誰宿ちかくぬきてかけ、む  
 131 蘭ふく秋かぜに玉だれのこすのま遠く匂ひこそすれ  
 132 秋かぜにことばをことに引なせば声ふりそふるのべの鈴虫  
 133 烏ばにかく玉づさの心地してかり鳴わたるゆふやみの空

(梅香入閨・瓊玉・宗尊親王・三三)

(落花入簾・顯季・三四)

(同・柏玉・後柏一・三五)

(同・同・三六)

(同・冷泉前大納言・三七)

(同・按察使親長・三八)

(同・雪玉・逍遙一・三九)

(同・同・同・四〇)

(同・政為・四一)

(泉声入夜寒・後拾・師賢・四二)

(涼風入簾・家集・為家・四三)

(秋風入簾・新後撰・津守国助・四四)

(同・続千・為氏・四五)

(同・師兼・四六)

(蘭香入簾・広綱哥合・兼弘・四七)

(同・同・忠元・四八)

(虫声入琴・続千・行宗・四九)

(入夜聞雁・新拾・西行・五〇)

134 かへるさの人は出ぬる槇のとかはるは月のひかりなりけり

(暁月入窓・御集・順徳院・五一)

135 賤がやの軒もみじかき芦簾ひまもる月は奥も限なし

(秋月入簾・雅親卿・五二)

136 あらはにや内もみゆらん玉だれの山のは出る月のひかりに

(山月入簾・頼綱・五三)

137 芦火たくこやのこすには山のはの月より外は入人もなし

(同・藤原隆賢・五四)

138 待むかふ影も程なし足引の嵐や月に簾まくらん

(同・後柏一・五五)

139 こすの内もあらはにみえて黛の緑ににほふ山のはの月

(同・逍遙一・五六)

140 残る夜の軒ばの雨に影みえて月や忍ぶの簾まくらん

(入簾残月影・後柏一・五七)

141 入月をしたふ木の間にみえてけり出しに増る心づくしは

(惜入月・政世・五八)

142 木のはふく嵐やこすを上つらん払ふにおしき塵の残れる

(落葉入簾中・家集・頼政・五九)

143 ことのねに嶺の松かぜかよふらし何のおよりしらべ初けん

(松風入夜琴・拾遺・斎宮女御・六〇)

144 松かぜの音にみだるゝ琴のねを引ば子日の心地こそすれ

(同・同・六一)

以上が『明題拾要鈔』に収載される「入」の一字を含む結題とその例歌であるが、これを『一字御抄』のそれと比較してみると、まず、『明題拾要鈔』の「晩鶯入霞」の題と115の例歌、「落花入簾」の118・120・121・123・124の例歌、「涼風入簾」の題と126の例歌、「秋風入簾」の127・129の例歌、「入夜聞雁」の題と133の例歌、「山月入簾」の138の例歌、「入簾残月影」の題と140の例歌、「惜入月」の題と141の例歌を、『一字御抄』が掲載していないのに対し、『一字御抄』は『明題拾要鈔』が収録していない「鶯入新年語」と「已入月」の題とその例歌である次の、

145 霜雪にむせぶおもひもうぐひすのうちとけゝりな春のひかりに

(鶯入新年語・逍遙院)

146 おしとみる思ひなしにや月の入山はとをきもちかくなりぬる

(已入月・後柏原院)

の145・146の二首と、「落花生簾」と「山月入簾」の例歌である、

147 あさぼらけ名にきくみねの雪とふる花の春にもまく簾哉 (落花生簾・同(文明十三年三月尽)・深草右大臣)

148 くまなしやいよすの風のさら／＼に山にむかへばさとの月かげ (山月入簾・後柏原院)

の147・148の二首を、各々掲載しているのである。

さらに、両集に収載される例歌について、本文異同の視点から比較してみると(上段が『明題拾要鈔』、下段が『一字御抄』)、

128	そてに吹まく	そても吹まく (第四句)
同	あきのゆふかせ	あきのゆふくれ (第五句)
130	すゝたれの	玉たれの (初句)
131	こすのま遠く	みすの間とをし (第四句)
132	秋かせに	秋風の (初句)
142	払ふにおしき	はらふもおしき (第四句)
同	塵の積れる	塵のつもれば (第五句)

のごとく七箇所異同が指摘できるのである。

これらの両集にみられる異同は、両集が同一人物の手になる著作と考慮するよりは、逆に、異なる人物による別々の著作と考慮するほうが妥当性を有するのではあるまいか。すなわち、両集のうち、『明題拾要鈔』が『一字御抄』を参看して成立している実態については、すでに検討したとおりであるので、このことも考え合わせると、

『国書総目録』や『大日本歌書綜覧』が、『明題拾要鈔』を『一字御抄』の改題本とみる見解には、にわかに賛同

することはできないのである。すなわち、両集は別人の手になる別本と考慮するのが至当であって、八寫正治氏が『日本古典文学大辞典第一巻』（昭和五八・一〇、岩波書店）の「一字御抄」の項目で、「なお、元禄四年刊の本書の類書『百題拾要鈔』七卷二冊は、宮内庁書陵部蔵。本書とは全く組織替えされていて、（以下略）」と言及されているのは卓見で、八寫氏の『明題拾要鈔』を『一字御抄』の「類書」とみる見解には賛同したいと思う。

ちなみに、『二字御抄』の序（版本）を参考までに掲げておこう。

此御抄者、太上天王の御自撰也。太上天皇と申たてまつるは、人皇百九代、御諱は政仁、後陽成院第二皇子、御母は中和門院近衛関白太政大臣藤晴嗣公の女也。慶長元年丙申御誕生、同六年三月廿七日受禪、四月十二日即位、御在位十八年、寛永六年十一月八日讓位於御女。慶安四年五月六日落簪、延宝八年庚申八月十九日崩。御寿八十五歳、奉号後水尾院。

天皇、万機の御暇もろくの事をすて給はぬ余り、和歌の道に遊び給ふ。御落簪のち、もはら此道を事とし給ひ、風雅の遠玄を窮め給ふと也。或は貫之の後、此君まさに千歳の間独歩し給ふといへり。

天皇刪正多しといへども、御心を用ひられ、和歌の幽微を尽し給ふ事は、此御抄にとまれりと也。これをたふとび、これを翫ふべきにこそ。

なお、『明題拾要鈔』の成立時期については、書陵部蔵の『百題拾要鈔』が示唆を与えよう。すなわち、該本は内容的にみて元禄七年の版本とまったく一致するが、序文を有しないことと、刊記を「元禄四辛未曆三月日／書林山口茂兵衛／長谷川伝兵衛」とすることの二点のみ異同している。ここで『明題拾要鈔』の成立時期を憶測するに、参看した『一字御抄』が元禄三年刊の版本であることと、『百題拾要鈔』が元禄四年（一六九二）に版行されている事実から考えて、『明題拾要鈔』の成立時期を、元禄四年と推定することは許されるであろう。

## 六 おわりに

以上、『明題拾要鈔』の基本的な問題について、種々の視点から検討した結果、いくつかの問題点を明らかにすることができたので、以下にそれらの成果を摘記して、結論に代えたいと思う。

- (1) 『明題拾要鈔』の伝本としては、元禄七年版行の版本が国立公文書館内閣文庫・盛岡市中央公民館・静嘉堂文庫・東京大・岡山大池田家文庫・天理図書館などに伝存する程度で、流布は意外に少ない状況にある。
- (2) 本書は三百四十六種類の実字および虚字一字を含む結題について、六千五百首の例歌をもって、いろは順に配列した類題集である。
- (3) 撰集資料としては、後水尾院撰『類題』（目録題には『類題和歌集』とある）が第一位に位置し、次いで後水尾院撰『一字御抄』が続き、以下、『和歌一字抄』（増補本）『題林愚抄』『続撰吟抄』『摘題和歌集』などがその後に続く。
- (4) 詠歌作者と原拠資料の上位十位は、後柏原院『柏玉集』、実隆『雪玉集』、『師兼千首』、政為『碧玉集』、慈円『拾玉集』、定家『拾遺愚草』『拾遺愚草員外』、俊頼『散木奇歌集』、家隆『玉吟集』、『為家集』、頓阿『草庵集』『続草庵集』などである。
- (5) 本書は、『大日本歌書綜覧』や『国書総目録』などによると、『一字御抄』を改題したものとの見解があるが、両者は各々独立した別本であって、換言すれば、本書は『一字御抄』の類書というのが適切であろう。
- (6) 成立については、書陵部蔵の版本『百題拾要鈔』が元禄四年に刊行されているので、元禄四年（一六九二）と推定してよからう。

なお、『明題拾要鈔』については、このほかにも種々検討しなければならない課題は多々あるが、基本的な問題についての一応の結論を出したいまは、このあたりで擱筆したいと思う。

〔付記〕 本稿を草するに際して、参照した『明題拾要鈔』の所蔵者盛岡市中央公民館に深謝申し上げます。なお、本書は近く古典文庫から翻刻出版する予定であることを申し添えておきます。